

## ．韓国のボランティア参加者の意識に関わるアンケート調査の分析

### 1．アンケート調査の概要

第 章でも述べたように、韓国ではボランティア活動に関する研究の歴史が浅く、特にボランティア参加者の意識に関わる調査・研究はほとんどなされてこなかった。しかし「5.31教育改革」を契機にボランティア活動への関心は高まっている。こうした現状をふまえ、先行調査の問題点を克服し、韓国人のボランティア参加者の意識と特徴を明らかにすることが本調査の目的である。調査項目は大きく3つに分かれ、ボランティア活動に対する意識、ボランティア活動の動機、ボランティア活動に関する希望、満足度等である。質問を決定するに当たっては、平成12年度国民生活選好度調査「ボランティアと国民生活」(経済企画庁国民生活局)を参考にした。

調査対象は、韓国の中高生・大学生であるが、参考のため社会人も対象とした。調査は、ボランティア団体等に参加している友人・知人を通じて、またはインターネットを利用して、電子メールで回答を得るという方法で行った。アンケート掲載期間は2001年11月15日～12月20日までであり、12月22日までに届いた回答を使用した。有効回答数は112で、その内訳は中高生30名、大学生64名、社会人18名である。またボランティア参加率は各々83.3%、75.0%、83.3%と高いが、これはボランティア団体等を通じて調査したためであると考えられる。以下に、回答者の分類とボランティア参加率について示しておく。〈資料 : アンケートの集計結果〉で、さらに詳しく分類した表を掲載してあるので、参照のこと。

< - 1表：本調査の回答者の分類及びボランティア参加率 >

中高生			大学生			社会人			合計		
	有	無		有	無		有	無		有	無
男	16	3	19	12	7	10	9	1	48	37	11
女	9	2	45	36	9	8	6	2	64	51	13
計	83.3	16.7	計	75.0	25.0	計	83.3	16.7	112	88	24
									100.0	78.6	21.4

備考：ここで言うボランティア参加率とは、「あなたは現在ボランティア活動をしていますか。」という問いに、「現在している」及び「過去にしたことがある」と答えた人の割合の合計。

最後に、調査に協力していただいた団体等を紹介しておく。韓国ボランティアセンター

協議会、韓国国際ボランティア機構、AMIS、国際交流支援団、祥明大学日本語教育科、慶北大学内ボランティアサークル、その他にも本調査に関心を持ってくださった多くの方から回答をいただいた。またボランティア21からは、調査実施に関して多くの助言をいただいた。では第2節から、調査結果について分析を加え、韓国人のボランティア意識について明らかにしていく。その際、韓国の特徴をより明確にするため、必要に応じて、同じ質問に対する日本人の回答も示していきたい。

\* 本調査を読む際の注意：結果数値(%)は小数点第二位以下を四捨五入してある、または無回答が含まれていないので、合計が100.0%にならないこともある。

## 2. ボランティア活動に対する意識

### 1) ボランティア活動についての考え方

まず、ボランティア活動について質問する前に、「あなたは日頃、社会の一員として役立ちたいと思いますか。」と聞いた。これについて、ボランティア経験のある中高生・大学生は、ともに6割が「無理のない程度で役に立ちたいと思う」と答え、続いて「多少のこと(時間や金銭)を犠牲にしても役に立ちたい」に中高生が20.0%、大学生は27.1%が答えた。これより、中高生では約8割が、大学生では約9割が社会の役に立ちたいと思っており、これについては他の同様の調査でも類似した結果が出ている<sup>2)</sup>。また「あまり役に立ちたいとは思わない」は大学生1人だけだったが、「関心がないので分からない」と答えた中高生は2割もいた。つまり、ほとんどの学生は社会の役に立ちたいと思っているようだが、関心のない中学生が案外多く存在することが分かった。

次に、ボランティア活動にどのような人が参加すべきだと思っているかについて聞いた。その回答結果を、ボランティアの経験の有無によって分類したものが次の表である。

< - 2表：ボランティア活動にどのような人が参加すべきか > ( % )

回答	ボランティア経験あり		ボランティア経験なし	
	中高生	大学生	中高生	大学生
みんなが積極的に参加すべき	16.0	12.5	0.0	0.0
可能な限り多くの人に参加すべき	44.0	66.7	40.0	87.5
時間的・金銭的余裕のある人だけが参加すればよい	20.0	4.2	40.0	12.5
意欲のある人だけに任せておけばよい	20.0	14.6	20.0	0.0

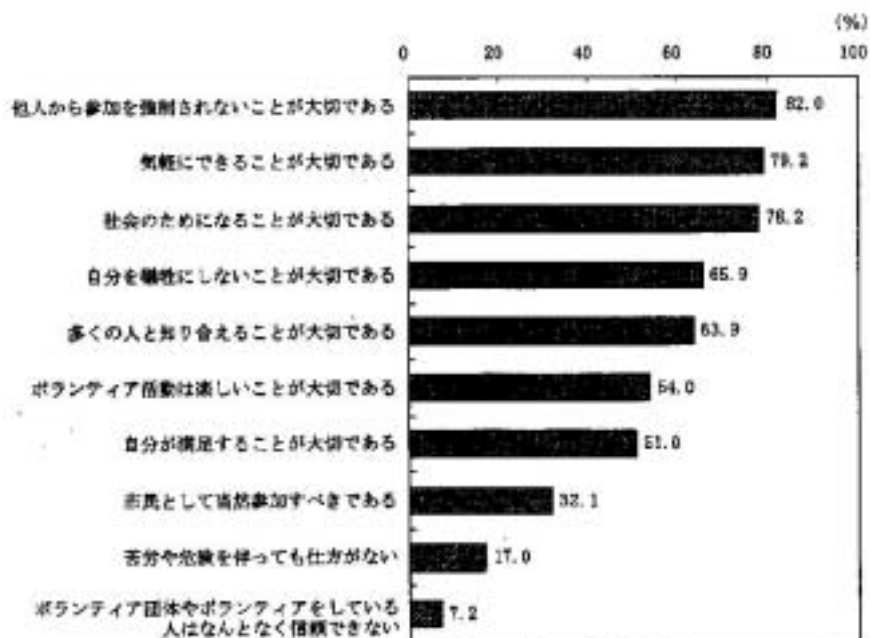
備考：「あなたはボランティア活動にどのような人が参加すべきだと思いますか」という質問に対する回答。

- 2表を見ると、ボランティア経験のある大学生の12.5%、中高生では16.0%が「みんなが積極的に参加すべき」と答えたが、経験のない人は一人も選ばなかった。ボランティア参加者は活動に何らかの価値を見出し、自分自身も含め、「みんな積極的に参加すべき」だと考えているのではないだろうか。また経験に関係なく、「可能な限り多くの人が参加すべき」と答えた人が、どのグループでも最多だった。特に、ボランティア活動の経験がない大学生の9割近くがこれを選んだ。「余裕のある人だけが参加すればよい」や「意欲のある人だけに任せておけばよい」というような消極的な態度は、中高生に特に目立つ。

続いて、韓国人のボランティア活動に関する考え方について、詳しく調査するため、「あなたはボランティア活動に関する次の考えについてどのように思いますか。ひとつひとつについて、あなたの考えに近いものをお答えください。」と、8つの項目について聞いた。この質問に対する回答は、< - 1図：韓国でのボランティア活動に関する考え方 > 参照。

- 1図を見ると、「自分が満足すること」、「社会のためになること」が大切と考える人はそれぞれ8割存在する。他方「多くの人と知り合いになれること」、「苦労や危険を伴っても仕方ない」が大切と考える人は5割にとどまる。この結果を日本と比較するため、同じ質問に対する日本人の回答を次に示す。

< - 2図：日本でのボランティア活動に関する考え方 >



(備考) 1. 「全くそう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した人の割合の合計。  
2. 回答者は13,972人。

出著：経済企画庁(2000)「国民生活選好度調査」

- 2 図より、日本では「他人から強制されないこと」を大切と考える人が 8 割を超え、また「気軽にできること」、「社会のためになること」も大切だと考えているようである。しかし韓国では、「他人から強制されないこと」や「気軽にできること」について批判的な考えが日本に比べて多く、それぞれ 18.1%、12.6%が大切だと思わない(「どちらかと言えば大切だと思わない」も含む)と答えた。これは何を意味しているのだろうか。日本でも様々なボランティア活動に関わった経験のある筆者は、日本人として、誰でも気軽に参加しやすいような雰囲気でのボランティア活動に自ら希望して参加する日本人の感覚は理解できる。だが、このような感覚を批判的に考える韓国人は、ボランティア活動を日本人とは違った視点で捉えているようである。困っている人を助ける活動には少しでも多くの人に参加すべきだが、そのような軽い気持ちの参加は困るというような感覚とでも言おうか。これは、特に社会福祉関連の活動をしているボランティアに見られる考えであるように思う。

## 2) ボランティア活動に参加する動機・きっかけ

それでは、韓国ではどのような気持ちや考えがボランティア活動に参加する動機やきっかけになると考えられているのだろうか。全ての人に「あなたは以下の項目がボランティア活動や寄付をするための動機やきっかけになると思えますか。ひとつひとつについて、あなたの考えに近いものをお答え下さい。」と、10項目について聞いた。< - 3表: ボランティア活動に参加するきっかけ > 参照。また、上位5位について、中高生と大学生別に挙げたのが次の表である。

< - 4表: ボランティア活動に参加するきっかけ(上位5位) > ( % )

中高生		大学生	
貧しい人を支援すべきという気持ち	96.0	左に同じ	100.0
自分や家族が関係している活動への支援	76.0	利益の社会への還元	89.6
知人や友人などの勧め	72.0	満足感を得ること	87.5
職業や住民としての義務を果たすこと	72.0	自分や家族が関係している活動への支援	83.3
満足感を得ること	72.0		

備考：ボランティア参加者及び経験者の回答のみ使用した。

「全くそう思う」及び「どちらかと言えばそう思う」と回答した割合の合計。

- 3表・ - 4表を見ると、上位5位までにおいては「そう思う」と答えた人が、中高生より大学生のほうが多いが、それ以外の項目では中高生のほうが多くなっている。特に「利益の社会への還元」に「そう思う」と答えた大学生が、中高生より2割以上多く、逆に「進学や就職に有利になること」に中高生は68.0%が「そう思う」と答え、大学生を約2割上回っている。また中高生・大学生ともに「自分や家族が関わっている活動への支援」の割合が高く、身近な活動に関わりたいという意識が見られる。

### 3.5.3.1 教育改革がボランティア活動に与えた影響

韓国では、1995年の「5.31教育改革」をきっかけに、ボランティア活動への関心が高まったと言われているが、実際はどうであろうか。どの程度関心が高まったか調べるため、「あなたご自身のボランティア活動に対する関心は、1995年の学校教育でのボランティア活動制度化をきっかけとして、高まったと思いますか」と質問した。それに対する答えを、以下に示したい。また< - 3図：「5.31教育改革」によるボランティア活動への関心の変化 > も参照のこと。

< - 5表：「5.31教育改革」によるボランティア活動への関心の変化 >

回答	ボランティア参加者		ボランティア未経験者		(%)
	中高生	大学生	中高生	大学生	
大変高まった	12.0	2.1	20.0	0.0	
高まった	52.0	29.2	20.0	12.5	
どちらとも言えない	28.0	41.7	60.0	43.8	
変わらなかった	8.0	20.8	0.0	37.5	
全く変わらなかった	0.0	4.2	0.0	6.3	

- 5表を見ると、ボランティア参加者が未経験者より、全体的に関心を高めたことが分かる。また「大変高まった」及び「高まった」と答えた大学生が3割なのに対し、中高生は6割以上と、より関心が高まったようであるが、これは中高生のほうが教育改革の影響を直接的に受けているためであろう。「変わらなかった」と答えた、ボランティア経験のある大学生も約2割と多い。このうち、「制度化される前からボランティア活動に関心があり、改革によって関心が高まったわけではないから」という人も数人いた。

次に、改革後にボランティア活動を始めた人がどの程度いるか、またその活動は現在も持続しているのかについて明らかにしようと、次のような表を作成した。

< - 6表：ボランティア参加者の時期別参加者数 >

ボランティア活動を現在	している	改革以前から ( 2 0 )	{ 改革以前にだけ ( 1 1 ) 改革以後にだけ ( 1 9 ) 改革以前も以後も ( 2 9 )                 }
		改革以後から ( 4 )	
	していない	過去にしたことがある ( 6 3 )	
		これまでにしたことがない ( 2 4 )	
		( 8 8 )	

備考：( )内の数値は、回答者数を表す。

- 6表を分析すると、過半数の人が改革以前からボランティア活動に参加していることが分かった。ボランティア活動への関心が高まる以前から、人々は活動に参加していたようだ。しかし、教育改革後にボランティア活動を始めた人で、現在もしている人は17%で、残り83%は調査時点で活動をしていない。活動が長続きしない背景には、日常的に活動することが必ずしも容易ではない要因等が関係していると考えられる。これに関しては、「活動を日常的にしたいか、期間を限った短期間の活動をしたいか」と質問した回答結果を第5節で示したい。

#### 4. ボランティア活動への満足・不満足度

ボランティア参加者は、自らの活動に対してどの程度満足している、または不満を感じているのだろうか。ボランティア参加者に、「あなたはボランティア活動をして、次の事項に関してどの程度満足しましたか(満足していますか)、それとも不満を感じましたか(不満を感じていますか)、ひとつひとつについて教えてください。」と質問した。回答は「満足」、「どちらかと言えば満足」、「どちらとも言えない」、「どちらかと言えば不満」、「不満」の五択である。この問いに対する答えは、< - 4図：ボランティア活動の満足度 > 及び、< - 5図：ボランティア活動の不満足 > を参照のこと。

ではまず、満足度について見てみよう。中高生が最も満足しているのは「自分が人間として成長できた」ことで、8割が回答した。また「困っている人の役に立てた」、「社会のために役に立てた」、「生きがいを見つけられた」ことにも、それぞれ76%と満足度は高い。一方、大学生の満足度が最も高いのは「社会のために役立てた」ことで、85.4%であった。次に「自分が人間として成長できた」、「活動をして楽しかった」ことが、それ

それ同じく79.2%である。

次に、不満足度について見てみよう。中高生は「社会的な評価を得られたこと」に対して、最も不満を感じており、2割が回答した。また「自分の知識・技術、能力、経験を生かしたこと」にも12.0%が不満だと答え、この項目には大学生も10.4%と、最も不満度が高い。それ以外の項目は1割に満たず、不満は想像より少ないようだ。

以上の結果から、中高生はボランティア活動に参加して、自分自身が困っている人や社会の役に立てることを実際の体験によって知り、そのような活動の中に生きがいを見つけたり、多くのものを得たりしている。また他人や社会の役に立てたという体験により、人間として成長したと感じているようだ。さらに「社会的な評価を得られない」ことへの不満は、ボランティア活動をすれば、就職や進学にも有利になるはずであるのに、期待していたほど周りからは評価されないことへの不満であると、解釈できるのではないかと。また大学生はと言うと、社会のために役立つ活動に、自分自身も楽しみながら取り組んでいるが、知識や能力を十分に生かしきれないことに不満を感じているという姿を描くことができるだろう。しかし、活動を通じて多くの人と出会えたことで、大学生も人間として成長できたと感じているようである。

## 5. ボランティア活動に対する希望

### 1) ボランティア活動への参加意思

ボランティア活動の経験のない人も含めた全ての人に「今後、ボランティア活動に参加したいと思いますか」と聞いた。その結果、ボランティア活動に参加する意思のある人は、5人に4人の割合で存在することが分かった。< - 6図：ボランティア活動への参加意思 > 参照。無回答を除けば「参加したくない」と答えた人は、わずか2人（中高生）である。日本で、参加意思のある人が3人に2人であることと比較しても、韓国ではボランティア活動への参加に積極的であることが分かる。また、「ぜひ参加したい」と最も強い意思を見せた中高生は8%、大学生では22.9%、「機会があれば参加したい」は中高生で88%、大学生で77.1%だった。これより、大学生のほうが参加に意欲的であることも分かる。

今後、ボランティア活動に「ぜひ参加したい」、「機会があれば参加したい」と答えた人（88人）に、参加したいと思った直接的な動機は何かと聞いた。その回答が以下の表である。

< - 7表：ボランティア活動に参加したいと思った直接的な動機 > ( % )

	中高生	大学生	社会人
自分の自発的な意思で	25.0	64.6	93.3
学校・地域・職場で機会があつて	37.5	8.3	0.0
友人・知人に勧められて	4.2	10.4	6.7
家族・親戚に勧められて	16.7	2.1	0.0
立場上やむをえないから	16.7	2.1	0.0
宗教上の理由で	0.0	6.3	0.0
新聞・雑誌・ポスター等の広告を見て	0.0	4.2	0.0
研修会・講習会・行事等に参加して	0.0	2.1	0.0

備考：ボランティア参加者または経験者のデータを使用。

- 7表から、中高生は「学校で機会があつて」参加する場合が37.5%と高く、一方、大学生と社会人の多くは「自発的な意思で」参加したいと考えていることが分かる。特に、先行調査に欠けていた本項目「自発的な意思で」への回答が大学生は最も多いが、その次「友人・知人に勧められて」が多い。これは大学生にとって、友人の勧誘が活動に参加する際の大きなきっかけとなっていることを証明していると言えるだろう。また他にも大学生は様々な動機・きっかけから参加したいと思っているようである。さらに「立場上やむをえない」と答えた中学生が16.7%いるが、この項目への大学生の回答者が少ないため、「進学・就職に必要なので仕方がない」という意味であろうと筆者は考えている。この結果からも、中高生がボランティア制度化の大きな影響を受けており、ともすると負担にもなっていると考えられる。

続いて、「自発的な意思」で参加したいと答えた人(51人)に、その気持ちに影響を与えたものは何かと聞いてみた。次の表がその回答である。



< - 8表：「自発的な意思」で参加したいという気持ちに影響を与えたもの >

単位：人（％）

	男	女	中高生	大学生	社会人
身近な人やグループが活動するのを見て	1 (4.8)	5 (16.7)	1 (16.7)	4 (12.9)	2 (14.3)
高齢者や障害者などに接して	2 (9.5)	8 (26.7)	2 (33.3)	7 (22.6)	2 (14.3)
活動している人の姿に感動して	4 (19.0)	5 (16.7)	3 (50.0)	6 (19.4)	2 (14.3)
活動している人やグループをマスコミで見て	0 (0.0)	4 (13.3)	2 (33.3)	2 (6.5)	2 (14.3)
地域社会に参加してみたくなくて	<b>6 (28.6)</b>	5 (16.7)	0 (0.0)	<b>9 (29.0)</b>	2 (14.3)
その他	<b>6 (28.6)</b>	<b>6 (20.0)</b>	0 (0.0)	<b>8 (25.8)</b>	4 (28.6)

備考：複数回答あり。回答者はボランティア参加者または経験者の中高生6人、大学生31人、社会人14人で、性別は男性21人、女性30人である。

- 8表を見ると、「地域社会に参加してみたくて」ボランティア活動に参加したいという大学生が多いが、中高生の回答者は0人である。これに関しては、「社会の役に立ちたい(91.7%)」<sup>1)</sup>、「利益を社会に還元したい(89.6%)」<sup>2)</sup>とと思っている大学生が多いことについて先にも触れた。またここでも、このように社会に貢献したいという大学生の姿を見ることができる。男女別に分析した結果、特に、男子学生にその傾向が強いことも分かった。女性の場合は、活動している人やグループを直接あるいはマスコミで見た経験、また高齢者や障害者に接した経験から、参加したいと思うようになった場合が多いようである。

また「その他」と答えた人(12人)が意外に多かったため、具体的にどのようなものが影響を与えたのか述べてもらった内容を、参考のため以下に記しておく。

私が持っている能力を他人と分かち合うことが、人間として当然のことだと神様が教えてくださった。困っている人を助けたい。活動を通じて何かを得たい。

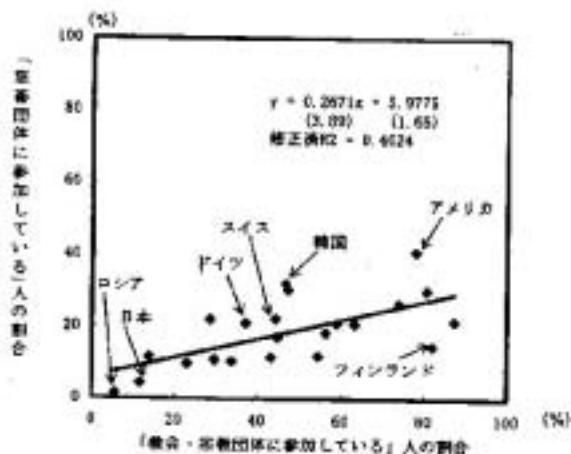
私が活動している施設の子どもたちは、ひどい言葉を言われ、捨てられた、私の子達を再び捨てるようなことはしたくない。家庭の宗教の影響。困っている人々が、自立的な生活を送れるような方向に導けるボランティア活動をしたい。助けなければ、という思い。今まで助けてもらってばかりだったが、私も他人を助ける時が来たと感じ

じた。(同様、他1名)他人を助けるだけではなく、私もそこから何かを学べるのであれば参加したい。自分の仕事に忠実であるため。(社会人)(以上、筆者訳)

このようにボランティア活動に参加する動機・きっかけについて、具体的に述べた人は活動にも積極的に参加していると考えられる。特に、ボランティア活動に自分なりの意義を見つけて、参加している大学生が多く見られた。筆者は、これには宗教の影響が大きいのではないかと考え、「その他」に回答した人の宗教を調べてみた。その結果、過半数がプロテスタントで、残りは無宗教であることが分かった。教会・宗教団体への参加率が高いほど、慈善団体への参加率が高い<sup>3</sup>という関係が他の調査でも明らかになっているため、以下にその相関図を示しておく。

< - 7 図 :

「教会・宗教団体への参加している」割合と「慈善団体に参加している」割合>



(備考) 1. [注] 電通総研。(財) 余暇開発センター「世界23カ国価値観データブック」により作成。

2. 各国の主な宗教(宗派)は以下のとおり(外務省のホームページ等による)。
- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 日本 神道、仏教ほか         | 韓国 仏教、キリスト教ほか       |
| 中国 儒教、道教ほか         | 台湾 儒教、道教ほか          |
| フィリピン カトリック        | オーストラリア キリスト教       |
| アメリカ キリスト教         | ドミニカ共和国 カトリック       |
| ヴェネズエラ カトリック       | ペルー カトリック           |
| チリ カトリック           | アルゼンティン カトリック       |
| スウェーデン 福音ルーテル教     | フィンランド 福音ルーテル教      |
| ドイツ キリスト教          | スイス カトリック、プロテスタント   |
| スペイン カトリック         | ロシア ロシア正教、イスラム教ほか   |
| スロヴェニア カトリック       | タモアチア カトリック         |
| ナイジェリア イスラム教、キリスト教 | 南アフリカ キリスト教、ヘンズー教ほか |
| ブルトリコ 不明           |                     |

- 7 図より、韓国は、各国と比較しても教会・宗教団体に参加し、なおかつ慈善団体にも参加している人の割合が高くなっている。これに関しては、第 4 章で考察したい。

## 2) 希望するボランティア活動

次に、活動への参加意思がある人を対象に、どのような活動を希望するか、参加したい活動分野について聞いた。< - 8 図：活動を希望する分野 > 参照。

まず断っておきたいが、- 8 図を見ると、社会人で「国際交流（協力）に関わる分野」を選んだ人が多い。ただ、これは国際交流に関わるボランティア団体に参加している友人を通じて調査した結果であるためと考えられる。しかし、この理由とは関わりのない大学生も「国際交流（協力）の分野」を意外に多く希望していることが分かった。活動分野の希望について、上位3位を挙げると次の通りである。

< - 9 表：希望する活動分野の世代別順位 >

	中高生	大学生	社会人
第1位	社会福祉	社会福祉	国際交流（協力）
第2位	体育・スポーツ・文化	国際交流（協力）	社会福祉、自然・環境保護
第3位	公共施設	学習の指導や助言	-

備考：ボランティア参加者及び経験者のデータを使用。すべて「～に関する分野」を省略。

中高生・大学生とも「社会福祉に関する分野」の活動を最も希望していることが分かる。これは、韓国においてボランティア活動と言えば、社会福祉というイメージが強いからであろうか。日本の場合<sup>4)</sup>は、「自然・環境保護に関する活動」が最も多く（41.4%）、次に「社会福祉に関する活動」38.4%、「体育・スポーツ・文化に関する活動」25.8%が続く。韓国に多い「学習の指導や助言」や「国際交流（協力）」は10%前後と少ない。韓国の18.8%の大学生が「学習の指導や助言に関する活動」を選んでいるが、これは現在、児童福祉施設等の子どもたちに学習指導する活動をしている人が多く回答している。よって、ほとんどの大学生は、この選択肢について「子どもへの学習指導の活動」と捉え、回答していると考えられる。

では、どのような地域範囲で活動したいと希望しているのだろうか。次の表が、その回答結果である。

< - 10 表：活動を希望する地域範囲 > (%)

	中高生	大学生
住んでいる市内・道内	36.0	37.5
通学・通勤範囲程度	0.0	18.8

住んでいる洞内	20.0	0.0
地域範囲はどこでも良い	24.0	33.3

備考：「ボランティア活動をするとしたら、どのような範囲で活動したいですか。」という問い

に対する答え。ボランティア参加者及び経験者のデータを使用。「具体的には分からない(中学生20.0%、大学生10.4%)」を除く。道は、日本で言う県に相当し、洞は町に相当する。

中学生・大学生ともに「住んでいる市内・道内」で活動したいと答えた人が、それぞれ36.0%、37.5%と最も多く、次に「どこでも良い」が続く。また中学生は「住んでいる洞内」、大学生は「通学範囲内」にそれぞれ約2割が回答している。

では、活動はいつしたいのだろうか。ボランティア活動へ参加したいと思っている人に、「日常的に活動したいですか、または期間を限って活動したいですか」と聞いた。その答えが、次の表である。

< - 11表：希望するのは日常的な活動か、単発の活動か >

	中学生	大学生	(%)
日常的にしたい	4.2	12.5	
どちらかと言えば日常的にしたい	<b>41.7</b>	22.9	
時間に余裕のある時にしたい	<b>41.7</b>	<b>31.3</b>	
期間を限ってしたい	4.2	<b>29.2</b>	
どちらでも良い	8.3	4.2	

備考：ボランティア参加者及び経験者のデータを使用。

- 11表を見ると、中学生・大学生とも約45%が「日常的にしたい(「どちらかと言えば日常的にしたい」を含む)」と答えた。特に筆者は、中学生のボランティア活動への参加は消極的であると考えていたから、日常的な活動を望むという結果は意外であった。加えて、「時間に余裕のある時」に活動したい中学生・大学生も多く、それぞれ41.7%、31.3%である。つまり長期休暇中の活動を望んでいるのだろう。これより、中学生は「日常的にしたい」、「短期間でしたい」が各々半数ずつであるが、大学生は「時間のある時、短期間でしたい」と答えた割合のほうが高い。このことから推察すると、忙しいのは中学生より大学生のように思える。

### 3) 活動を困難にする要因

ボランティア活動への参加意欲を持っていても、それが実現しない背景には、活動する時間の制約、活動に関する情報の不足等の要因が考えられる。よって本調査では、「あなたはボランティア活動をするときに、次のような要因は活動の妨げとなりますか。」という質問を最後にし、次のような4つの項目を挙げた。< - 9図：ボランティア活動の妨げ要因>参照。また、この結果を世代別に分類したものが次の表である。

< - 12表：ボランティア活動の妨げ要因> (%)

回答	中高生	大学生	社会人
情報が無い	40.0	<b>54.2</b>	<b>80.0</b>
身近に適切な団体がない	<b>56.0</b>	45.8	73.3
家族の理解が得られない	20.0	16.7	26.7
活動する時間がない	36.0	<b>52.1</b>	20.0

備考：回答は上から順に、「ボランティア団体に関する情報が無いこと」、「身近に適切なボランティア団体がないこと」、「家族の理解が得られないこと」、「活動する時間がないこと」。  
ボランティア参加者及び経験者のデータを使用。

- 9図・ - 12表を見ると、大学生と社会人は「ボランティア団体に関する情報が無いこと」が活動の最も大きな妨げの要因となると考えている。これは前述したように、いざボランティアに参加しようと思っても、どうすれば良いか分からない、どのような活動があるのか分からないという人が多いことを示している。あるいは、ボランティア活動に関する情報提供への要望が高くなっているためであると考えられる。活動に関する情報不足に対応するためには、幅広い手段で情報を提供することや、ボランティアセンター整備等が有効であるだろう。一方、中高生は「身近に適切な団体がない」ことが最大の要因であると答えている。これは、ボランティアの制度化により、突然多くの中高生ボランティアが活動することになったが、受け皿が整っておらず、中高生たちも困惑している状況を表しているのではないかと考えられる。他にも、「活動する時間がない」と答えた大学生は過半数に上る。活動する時間がないことはボランティア活動を始めようとする際の妨げの要因となるだけでなく、活動を始めてからも、継続を困難にする要因となるため、何ら

かの解決方法を考える必要がある。

---

(注)

- <sup>1</sup> インターネットの利用とは、ボランティア団体等の HP 上の掲示板に、承諾を得た上でアンケートを掲載したことである。
- <sup>2</sup> 総務庁青少年対策本部（1999）によると、「自国のために役立つようなことをしたいか。」という問いに対し、日本では「はい」が約5割だが、韓国では8割を超える。「いいえ」は日本が約3割、韓国は約1割である。この報告書は、世界11カ国の18歳から24歳までの青少年を対象とした国際比較調査である。
- <sup>3</sup> 前掲書、pp. 59
- <sup>4</sup> 前掲書